

リ
セ
ツ
ト

登場人物紹介

◀ リヒルーチェ公爵夫妻

アイヴァン、ミリエル
ルーナの両親。
王家に繋がる名門貴族。

▼ アマリー

ルーナの姉。勝気な美少女。

▲ ジーン

ルーナの長兄。利発なしっかり者

▼ ユアン

ルーナの次兄。のんびり屋。

▲ ミチオ

死んだ千幸の前に突然現れた
彼女の担当天使。

▲ 千幸

超不幸体質だが前向きに
生きていた女子高生。

▶ リュシオン

クレセニアの王太子。魔力が
強大すぎて周りから恐れられている。

▲ フレイル

不思議な力を持つ少年。
ある理由から他人を
信用していない。

▲ カイン

公爵家に身を寄せる謎の少年。
普段は穏やかだが怒ると……

▲ ルーナ

女子高生・千幸が転生した姿。
前世の記憶と強大な魔力を持ちつつ
0歳から人生やり直し中。

第一章 不幸少女の最大の不幸

人生をリセットできるなら、次はどんな風に生きたいですか？

「バカヤロー！」

あたりがすつかり暗くなった時刻。市街地近くにある山の展望台に少女の叫びが響き渡った。

少女の名は高崎千幸。近くの公立高校三年の十八歳だ。

凍えそうな寒さの中、白いロング丈のダウンコートに色褪せたジーンズという服装の彼女は、展望台の柵から身体を乗り出すようにして叫び続けていた。

健康的な肌色は寒さと興奮で赤く上気し、黒より若干明るい栗色の髪が、はらりとその頬にかかる。人がいれば、こんなところで叫び続ける少女はさぞや奇異に映っただろう。

しかしこの日の展望台に人の姿はなく、暗闇を心細く照らす外灯の下には、千幸の姿だけがあつた。荒い息をつき、千幸は涙の浮かんだ目元を乱暴に手で拭くと、柵に手をついた。

今から数時間前――

ホームルームの終わりと共にざわめく教室の中、千幸は一人黙々と帰り支度をしていた。放課後はバイトがある。出勤時間までにはまだ余裕があるが、一人暮らしの彼女はその前に色々雑用を済ませておかなければならない。

そのため学校が終われば、寄り道することもなく帰宅するのが常だった。千幸には両親がいない。

二人とも彼女が幼い時に亡くなり、引き取ってくれる親戚もいなかったため、彼女は施設で育った。本来ならば高校卒業まで施設で過ごすはずだったが、奨学金を得て高校に通うことになった時、通学に不便という事情から院長に一人暮らしを勧められたのだ。

その際手続きはおろか、家賃でさえ母代わりともいえる院長が「出世払いでいいわ」と個人的に用立ててくれた。

その上生活費の援助まで申し出てくれたのだが、さすがにこれ以上は甘えすぎだろうと思った千幸は、それを丁重に断り、自らの生活費をまかなうためにバイトを始めたのだった。

「高崎さんっ」

教室を出たところで声をかけられ、千幸は後ろを振り返る。

「はい？」

呼びかけた少女に見覚えはあるのだが誰かは思い出せず、千幸は首を傾げた。

「あたし森永と同じクラスなんだけども、アイツから伝言頼まれたんだ。えっとね、三階の資料室に来てって」

出てきた名前に、千幸は合点がいったようにうなずいた。

森永晴樹は三ヶ月ほど前から付き合っている千幸の彼氏だ。バイト先が同じだったことで仲良くなり、彼からの告白で付き合うことになった。

彼とはクラスが離れているため、教室も違う階にある。そう考えれば彼女のことを思い出せないのも納得がいった。

「そっか。わざわざありがとね」

ペコリと頭を下げ、千幸が丁寧に礼を言うと少女は愛想良く笑った。

「いいよ。早く行ってあげて」

そう言っつてその場を去る彼女を見送ってから、千幸は呼び出された資料室へと向かって歩き出した。

(バイト先で会えるのに、なんで呼び出しなんだろう?)

理由を考えているうちに資料室へ辿り着く。

扉を開けようとした彼女は、中から聞こえる声にその手を止めた。

「……つてばあ。もお」

クスクスと笑う声の中から聞こえ、千幸はどうしたものかと逡巡する。それでもこのままでは埒が明かないと、思い切っつて扉を開けることにした。

「——っ!!」

飛び込んできた室内の光景に、千幸の息が止まる。

抱き合う男女のキスシーン。しかも、その一方は千幸の彼氏である晴樹だった——

息を呑む千幸の存在に、互いしか目に入らなかった彼らも気づいたらしい。

「ち、千幸!？」

驚きの声をあげる晴樹を、千幸は答えることなく呆然と見つめる。

晴樹は慌ててキスを交わしていた少女から離れるが、そんな態度に少女の方は不満そうな声をあげた。

「ちよつとお！ なあに焦ってるのよお」

「おいっ」

晴樹の首に自分の腕を巻きつけながら、少女は挑戦的な眼差しで千幸を見る。彼女がこちらを向いた途端、千幸は知っている顔に思わず「あっ」と声をあげた。

島田麗佳しまだれいか。地元の名士の娘であり、美人で成績も優秀。さらに社交的な性格も相俟あいまって、教室に君臨する女王のような少女だった。

高校は同じクラスではなかったため疎遠だったが、実は彼女と千幸は中学校の三年間は同じクラスだった。

ただ実際は、元同級生などという単純な関係ではない。

麗佳は何故か昔から千幸が気に入らず、ことあるごとに目の敵に——簡単にいえばいじめの標的にしてきたのだ。

「もお、いいじゃーん。晴樹言っただでしょ？ あんなつまらない女とは別れるってさあ」

楽しそうに暴露する少女を見て、千幸は一瞬で彼女の迷惑を理解した。

そう考えれば、晴樹の伝言を伝えてきたのも麗佳の取り巻きの一人だったと今更気づく。

(あれは、浮気現場を目撃させるための伝言……?)

答えが導き出されたからといって救いはない。

「なんでっ……晴樹っ!」

千幸が悲痛な声で問いかければ、晴樹はバツが悪そうに頭を掻きながら口を開いた。

「なんでって、今時お子様じゃあるまいし、清い交際とかありえねえだろ？ だから浮気したくなるんじゃない」

「そんな……」

「もうっ！ 浮気じゃなくて、こっちが本命だっって言っつてよねえ」

甘えた声で晴樹の肩を叩く麗佳に、聞き直ったのか晴樹は「わりい」と笑顔を見せる。

「ま、そういうことだしちよっどいいか。悪いけどおまえとは別れるわ」

「あーら、振られちゃった。かーわいそお」

同情の言葉を口にする麗佳はそれとは裏腹に、混乱する千幸を満足そうに見つめていた。

(どうして? なんでこんなことに?)

理不尽な展開に千幸の目に涙が浮かぶ。けれどそんな彼女を嘲笑うように、麗佳はさらに追い討ちをかけた。

「てかさあ、晴樹つてば知ってるう? この子つてば親いないのよ。今は一人暮らしだけど、ずっと施設で暮らしてたんだからあ」

「マジで?」

「嘘じゃないわよお。ねえ、高崎さん?」

「へえ、施設つてひよつとして親が虐待とか? そんな身内いるとかやべえだろ。別れて正解だったかもなあ」

適当な思い込みで、残酷な言葉を軽々と口にする晴樹の前で、千幸の心は容易く粉々になった。逃げ出したい。一秒でもこの場にいたくない。そう思いながらも、心に受けた衝撃のせい、凍りついたように千幸の身体は動かなかった。

そんな彼女の横で、二人はなおも会話を続ける。

「そういうのは最初に言っとけよなあ。あーあ、俺つてば騙されてた?」

「そうよねえ。晴樹かわいいそお」

(親がいないのは恥ずかしいこと?)

「だよなあ。俺バイト辞めるから学校でも話しかけるなよ、嘘つき女」

(話さなかったことは、そんなに悪いこと?)

「ちよつとお、そんなこと言ったら彼女、泣いちゃうんじゃない?」

「嘘つき女にまで同情するとか、麗佳優しいなあ」

「惚れ直した?」

「おー。んじゃもう行こうぜ」

汚いものでも見るかのように千幸を一瞥すると、晴樹はそのまま彼女の横を通り過ぎる。彼の後に続いた麗佳は、千幸の横で立ち止まると彼女の耳元に囁いた。

「ざまーみろっ」

パタンと扉が閉まると同時に、千幸の瞳から涙が零れ落ちた――

十

自宅である古びたアパートに帰り着いた千幸は、外にある鉄骨階段をとぼとぼと上り、二階の端のドアを開けた。

玄関を入つてすぐ横にある小さなキッチンと、その奥の六畳間。本棚とその上に置かれたテレビ、あとはコタツがあるだけの殺風景な部屋に入ると、千幸は電灯も暖房のスイッチも入れることなく座り込んだ。

思い出したくないにもかかわらず、何度も先ほどのやり取りが脳裏に再現される。千幸は零れそうになる涙を堪え、キュツと唇を噛んだ。

寒々しく薄暗い部屋でどのくらいの時間そうしていたのだろうか。

千幸は突然聞こえてきたメロディに、驚いてビクリと身体を揺らした。すぐにそれが携帯電話からのものだと気づき、スカートのポケットに手を伸ばす。

携帯電話の画面には、あらかじめセットしておいたバイトの出勤時間を知らせるアラーム表示が出ていた。画面に表示された時刻を確認すると、帰宅してから随分な時間が過ぎていくのに気がつく。

「用意、しなきゃ……」

正直バイトに行くのも気が進まないが、その気持ちに従えるほど千幸の環境は甘くない。急いで制服を着替えると、ダウンコートを羽織り、帆布はなぶさのトートバッグを肩にかけた。

普段ならば出勤前には洗濯などの家事をこなすのだが、今日はもうその時間がないまま彼女は慌わだたしく部屋を出ていく羽目になった。

千幸のバイト先は、自宅から十分ほどの場所にある洋菓子店だ。

高校に入学して最初に始めたバイトは、個人経営のカジュアルフレンチのレストランだった。この店で料理の手ほどきを受けた千幸は、作る楽しさに触れ、漠然ぼぜんとだがその方面の仕事に就きたいと考えるようになった。

そんな彼女を応援してくれていたオーナーは、自身の高齢を理由に閉店を決めた時、彼女の夢が叶うようにと知り合いの洋菓子店を紹介してくれた。それが現在のバイト先だ。

料理と同じく、作る楽しさは菓子作りにもいえる。

厨房スタッフとはいえ雑用からはじまった千幸だが、その熱心さを買われ、最近ではバイトながらパティシエのアシスタントとして扱われるようになっていた。

卒業後はこの店に就職し、働きながら技術を学ぶことも決まっており、千幸はバイトの時間を楽しみにしているくらいだった。——今日までは。

（晴樹、バイト辞めるって言ってたけど、さすがに今日いきなりってことはないよね……）

店の前に来てそのことに思い当たった千幸は、思わず足を止めた。

放課後までは久しぶりに晴樹と同じシフトだと喜んでいたのだが、今はさすがに彼と顔を合わせるのが気まずい。

喫茶スペース担当の晴樹と、厨房担当の千幸では勤務中に顔を合わせることは少ないが、それでもまったく接触がないわけではないのだ。

（バイト先の人にはわたしたちが付き合ってたのを知らないけどさ……）

憂鬱ゆううつな気分ではあったが、お小遣い稼ぎで働く他の高校生とは違い、千幸に『欠勤』という選択肢はない。

彼女はパチンと自分の頬を叩くと意識的に明るい表情を作り、従業員入口へと向かった。

+

「ちいちゃん、ちょっと倉庫からこの備品取ってきてくれないかい？」

「はい、わかりました」

店長の馴れ馴れしい呼び方に戸惑いつつ、千幸は素直にうなずいて彼からメモを受け取る。二ヶ月前に別の店から異動してきた彼は、オーナーの親戚という立場を笠に着た厄介な人物だった。当然のごとく従業員からは嫌われていたが、それに気づかないため態度を改めることもなく好き勝手に振舞っていた。

厨房にすることが多い千幸は、主に事務所や接客スペースにいる店長と接触することはほとんどなかったが、今日はたまたま接客スペースへ出たところで、運悪く彼に捕まってしまったのだ。「こんなこと頼まれるなんて今日はほんとに最低だ」

店長から受け取ったメモを見ながら、千幸はイライラとつぶやく。

気合を入れてバイトに出勤してみれば、晴樹は風邪で欠勤だと知らされた。当然ながらそれが嘘であることを千幸は知っている。

（晴樹が休みなのは正直ホッとしたけど、結局逃げるとかヘタレすぎでしょ……。はあ、それにしても何よこれ）

メモに書かれているのは事務用品ばかりだ。事務所のスタッフではなく、厨房スタッフの彼女にこれらを取りに行かせるのはおかしい。

晴樹のこともあり、それが余計に千幸をイラつかせた。

（あーもう、ホイップかき混ぜなきゃなのにつ！ てゆーか、店でいちばん暇なのは店長なんだから、自分で取ってこいっつーの!!）

店長への怒りを沸々とさせながら、倉庫に着いた千幸はポケットから鍵を取り出し、アルミドアを開けた。

入口近くには、粉類などの菓子材料が積まれて置かれている。文房具や伝票などの事務用品は、最奥に並べられたキャビネットに片付けられているはずだ。

彼女はキャビネットをひとつずつ確認しながら、メモにある備品を取り出していく。

メモと備品を照らし合わせていると、ガチャッと背後でドアが開いた。

驚いて振り返ると、そこにはドアを後ろ手に閉めて立つ店長がいた。ニヤニヤと不愉快な笑みを浮かべる彼に、千幸はゾクリと全身が粟立つのを覚える。

「店長？ どうしたんですか？」

ゆっくりと近づいてくる店長に、千幸は平静を装いながら尋ねた。しかし彼はそれに答えることなく、無言で距離を縮めてくる。

千幸は無意識に後退るが、背中に壁の感触を感じて後がないことを知った。

店長は怯えた表情の千幸に嗜虐心を煽られたのか、ニヤリと嗤う。

「ちいちゃんっ」

名前を呼びながら突然抱きついてきた店長に、ぞわぞわと千幸の背筋に悪寒が走る。

「やめて下さいっ！」

強い口調で抗議しながら、千幸は必死に身を振って抵抗した。

しかし、小柄とはいえ肉付きも良く力も強い店長は、手向かう彼女などものともしない。その片

手を千幸の腰に回し、もう一方の手をいやらしく彼女の身体へと這わせ始める。

「やつ、やだあつ！」

店長の生温い手が腰からヒップのラインを撫でつけ、千幸は嫌悪で顔を歪めた。

「どうせ適当に遊んでるんだろ？ な、いいだろ？ なんなら小遣いもあげるから……」

屈辱的な言葉と共に店長の荒い息が頬にかかり、彼の手が今度は太ももの内側へ向かう。あまりの気持ち悪さに吐き気を感じながら、千幸は彼の腕の中でめちゃくちゃに暴れた。

「いやああつ!!」

千幸の反撃に、彼女をpushさえてつけていた店長の身体が少しだけ離れる。彼女はその後を逃さず、渾身の力を込めて店長へと体当たりを仕掛けた。

ドンツという音と共に不意をつかれた店長は、二歩、三歩と後ろへよろめくと、そのまま尻餅をついて倒れこんだ。

「うつ……」

痛みには目もくれず、千幸はその場から逃げ出すと、そのままロッカー室へと駆け込んだ。

ドアを閉めて鍵をかけると、ホツとした反動で力が抜け、ずるずるとその場に崩れ落ちる。未だ身体を這う手の感触が消えず、千幸は震えながらぎゅつと自分を抱きしめた。

(どうしよう、ここに店長が来たら……)

そう考えただけで千幸の震えは酷くなる。

店長とまた顔を合わせるなど考えられない千幸は、なんとか立ち上がると急いで制服を着替え、ロッカーの荷物を持ってそのまま店を飛び出した。

店を飛び出したものの、一人暮らしの家に帰るのも怖くて、千幸はあてもなく歩き続けていた。気がつくとな彼女は、市街地のはずれにある、展望台へと続く山道に辿り着いていた。

車一台が通れるほどの道路は、道幅は狭いがきちんとアスファルトで舗装されている。それとは対照的に、ガードレールの向こうは鬱蒼とした手付かずの山林が広がっていた。

明かりも乏しい夜の山道を、普段なら酔狂にも徒歩で登ったりはしなかっただろう。だが今日の千幸にとっては、人に会わないことだけが重要だった。

三十分ほど黙々と歩いたところで、ようやく展望台に辿り着く。

真冬の寒さのせいも、駐車場の完備された展望台には車も人も見当たらない。

千幸は駐車場の隅に設置された東屋へと向かうと、中にあるベンチに腰を下ろした。ふうつと息をついた途端張り詰めていた気が緩んだのか、涙が次から次へと零れ落ちる。

「なんで……いつも……こうなの？」

流れる涙を拭いもせずに、千幸は嗚咽まじりの声を漏らす。

千の幸せ。そんな名前をもらいながらも、幸せなど遠すぎ、少なすぎる人生だと自嘲気味に思う。反対に不運や不幸なら、簡単に数えあげられた。

そう、滅多にありえないような今日一日の不幸な出来事は、ある意味彼女の日常だった――

最初は誕生の時だった。健康で病気ひとつしたこともない母親が、お産の最中に脳溢血で亡くなつてしまったのだ。

突然妻を亡くした父親は、衝撃と失意のあまり、親であることを放棄した。家庭を、娘を顧みることなく仕事を逃げ場にするようになったのだ。

彼女は誕生と共に母親だけではなく、父親まで失ったも同然だった。

だが彼が逃げ場とした仕事は、不況のおおりで行き詰まり、あっさりと倒産する。

大きな負債を背負った彼は心労で身体を壊し、千幸が二歳になる前に今度は死という形で永遠に彼女の前から去った。

皮肉なことに残された負債は、彼が死ぬことによつて生命保険で完済された。

引き取ってくれる親戚もおらず天涯孤独になった千幸は、当然のように施設に引き取られた。

だがそこでも彼女は辛い生活を送ることになる。

最初に預けられた施設では、火事によつて一緒に暮らす数人の仲間を亡くした。

辛い出来事から表情を失くした千幸は、一時的に里子として引き取られた先でも笑うことができず、里親から疎んじられることになった。

食事を抜かれ、殴られる。家から夜中に追い出されることもあった。

数ヶ月後、エスカレートした虐待により大怪我を負つて救い出されるまで、幼い千幸は毎日酷い

生活に耐えていたのだ。

新しい施設の院長は、そんな彼女に母のような深い愛情をもつて忍耐強く接してくれた。そのおかげもあり、やがて千幸は元の明るい表情を取り戻すことができた。

しかし小学校にあがつてしばらくした頃、施設で暮らす千幸を『異質』と判断した同級生たちによつて仲間はずれが始まった。それはすぐに過酷ないじめへと変わつてゆく。

抵抗すれば「施設の子だから」と逆に相手の親が院長を責めた。それに対してただ謝罪する院長は、彼女には決してその姿を見せようとはしなかった。

だが周りからそれを聞いた千幸は、以来どんなに酷い目にあつても黙つて耐えることを選んだ。やがていじめは収まるが、中学になると麗佳のような人物がまた現れた。

それでも千幸が耐えてこられたのは、母親代わりの院長や、施設の仲間、バイト先のオーナー、そして少ないながらも常に彼女の味方となつてくれる友達がいたからだろう。

それだけは胸を張つて言える、千幸の『幸せ』だった。

だからこそ彼女は、落ち込んだり泣いたりしても、その都度立ち上がることができた。むしろ自分の不幸を笑い飛ばし、いつだつてポジティブに未来を、前だけを見ることができた。

だがそんな前向きな彼女でも、失恋にセクハラ、そしておそらく解雇も含めたトリプルパンチが一度にくれば、落ち込んでしまうのは仕方がないことだろう。

満天の星の下、思う存分泣いて、思う存分落ち込んだ千幸は、涙を拭うとおもむろにベンチから

立ち上がった。

東屋ひがしやから出て、街を一望できる展望台から真下を見ると、そこは垂直な崖になっており、真つ暗なその先に落ちればただではすまないことを窺うかがわせる。

「ここから落ちたら死ぬるかな」

ポツリとつぶやいてから、千幸は自分の言葉にハツとする。

「死ぬとか何言ってるのよ……生きたくても生きられない人がいるのをよく知ってるじゃない」

脳裏に浮かぶ懐かしい人を思い出しながら、千幸は最低の言葉を吐いてしまった自分へ憤いらだりを向ける。

「今までだつてもつと辛かったこともあったし。それでも頑張ってきたじゃん！」

自分への励ましに思わずクスリと笑い、千幸は暗い思考を促うながす真つ暗な柵さくの真下ではなく、明るく眼下に広がる、寶石のような街の夜景に目をやった。

「叫んだらすつきりするかなあ……」

ふと口にしてみると、それがとてつもなく魅力的な思いつきに思えた。

幸い辺りには誰もいない。

(誰かに聞こえてたつていつか。ストレス解消に叫びまくつてやる！)

千幸はすうつと大きく息を吸い込むと、遠くの街明かりに向かって叫ぶ。

「バカヤロー！」

最初の一声がこだまするのを聞きながら、彼女はさらに声を張り上げた。

「失恋がなんだーっ！ 晴樹よりいい男なんて星の数ほどいるっつーの！！

いい男捕まえて麗佳に自慢してやるんだからっ！ あとセクハラ野郎！ 明日絶対殴るっ！！
それから……絶対、ぜーっつたいっ幸せになつてやるーっ！！」

静かな夜の展望台に、しばらくの間千幸の叫び声が響き渡つていた――

「はあ……すつきりしたかも」

少しばかりかすれた声で千幸はつぶやいた。感情のままに思い切り叫んだせいか、憂鬱ゆううつな気分も吹き飛んだ気がする。

(よし、また明日から頑張れる！)

そう前向きに決心した時だった。

――ドンッ

背中に凄まじい衝撃を感じ、柵から身を乗り出していた千幸の身体は、あっさりとその柵を乗り越えた。

(うそでしょ?)

空中に浮いた身体が、次の瞬間加速して落下する。

逆さになつて落ちる瞬間、千幸の目に黒い大きな動物らしき影が映った。

両目を光らせた黒い影は、彼女を地獄に突き落とす魔物のように見えて、千幸の全身は言いようの無い恐怖に支配された。

それは落下していく恐ろしい感覚と共に、彼女の心へと深く爪をたて、傷を刻み込む。
(ありえない……)

固い地面に近づくのをぼんやり感じながら、千幸の意識はそのままフェードアウトした。

十

「どもつ、高崎千幸さん。担当天使のミチオです」

「……はあ」

目の前で白い羽根を生やした白いスーツの男が、にこやかに握手を求めた。

にへらと笑うその顔は、愛嬌あいきょうのある童顔だ。

千幸は差し出された手におずおずと自分の手を重ねるが、その表情は胡散臭うさんくさい人物を見るそれだった。

それでも彼女が騒ぎ立てないのは、周囲の状況があまりにも現実離れしていたからだ。

まず風景というものがない。奥行きさえわからないほど、ただどこまでも白いのだ。ふと自分を見下ろせば、着ていた服まで飾り気のない白いワンピースに変わっている。

幸か不幸か、千幸には展望台から落ちたという最悪の記憶があった。

さらに目の前には天使と名乗る男がいて、背にはとても作り物とは思えないほど精巧な、パタパタと動く羽根を生やしている。

それらのピースを嵌め込んでいけば、ありえないと思いつつもひとつのバズルが完成する。

(信じたくないけど、こっつて天国って奴かも……)

はあつとため息をついた千幸に、目の前の天使——ミチオはためらいがちに声をかけた。

「えーと、薄々わかっていると思いますが、まず貴女あなたは先ほど天に召されました」

(そんなニコニコ言われると、なんだか死んだのを喜ばれてるみたいでムカつくんだけど……)

顔を顰しかめた千幸に気づかないのか、ミチオはなおもニコニコと笑顔で話し続ける。

「それでですねえ、私、千幸さんに謝らなくてはならないことがあるのですよ」

「謝る？」

「そうなんです。実は千幸さんは今日死ぬ予定ではなかったんです」

「はああ？」

ミチオの言葉に、千幸は思わず大きな声をあげた。彼はそんな彼女に構うことなく淡々と話を続ける。
「申し上げにくいのですが、今日死ぬのは千幸さんにぶつかったイノシシの予定だったんです」

「イノシシ!?」

(あの衝撃はイノシシだったのか……ってことは最後に見た黒いものが?)

「そうなんです。野生の獣というのは本能で生きているものですから、稀まれに鋭く死の存在を感じと

るんです。そしてパニックに陥る個体がいるのですよ」

「……ど？」

「そ、そんなに暇まないで下さいよ。笑った方が可愛いですよ。ほらスマイル、スマイル」

「……早く続き話して」

「わ、わかりました。続けますね。で、パニックになって逃げ出したイノシシが突進した先にいたのが千幸さんっ、貴女あなたなんですー」

パチパチと拍手しながら、まるで千幸が何かに当選したかのようなミチオの態度。それにプチンと切れた彼女は、無言でミチオの腹に一発拳を打ち込んだ。

「ぐふっ……いいパンチです」

倒れかかりながらも親指を立てて見せたミチオに、千幸は冷たい目で先を促した。

「いいから、さっさと続き」

「は、はいっ。こんな事故は滅多にないことなんですけど、調べてみたら千幸さんって稀まれに見る不幸体質なんですネ……お気の毒です」

(天使にまで同情されるほどの不幸体質だったのか……)

いたわしそうな眼差しを向けるミチオに、千幸の顔がヒクヒクと引き曇る。

「だって本来ならあの場所にイノシシが現れることは稀ですし、出たとしてもこの寒い日にあの展望台に人がいることも滅多にないので、イノシシがたとえ暴れたとしても問題は無いはずなんです。つまりこんな偶然が重なる確率は、小数点以下のゼロがどんだけあってくらいありえない事故なんです。

す。これはもう、ある意味すごいことですよ？」

「そう……だね」

妙な感心をするミチオに、さすがにポジティブ人間の千幸もへこむしかない。

「落ち込まないで下さいよ。……それで続きなんですけど、人間は不運と幸運の二つを決められた量を持って生まれ、両方を寿命までに使い切るものなんです。

もちろん魂の位によって器の大きさは違いますから、運の量というのも違ってきますけど。で、人生の前半にほとんどの不運を使いきり、幸運をほとんど使っていない千幸さんは、これからの人生において不幸体質が一変して幸運体質になる予定だったんですよ。だって使わないと、寿命までに幸運を使い終わりませんから。

しかも千幸さんの魂って実はかなり高位なんです。運の量も相当なんです。だからこそあれほどの不幸に見舞われてしまったわけですが。

そういう訳で、本当は明日から不幸人生どころか、幸運人生の始まりのはずだったんですよ。

——まあ死ななければ、だったわけですが」

「マジで？」

「マジですー。でも死んじゃったんですよえ……」

いかにも残念とばかりにため息をつくミチオ。千幸の被害妄想かもしれないが、その眼差しは不憫ひんな者を哀れむような、そんな同情を含んでいるように見えた。

死ぬ直前に言っていた「幸せになる」という言葉は現実になるはずだったのだ。

千幸の最大の不幸が『死』であり、それが手違いで訪れたのが、彼女の最後の『不幸』であることは否定の余地もなかった。

「てかわたし、可哀想すぎじゃん！」

「ですよー。まあイノシシのせいとはいえこちらの不手際もあるわけですし、謝罪も含めて頑張った貴女に神様からご褒美が出るようになったんで、あまりへこまないで下さい」

「ご褒美？ 何？ 何してくれるの？」

ご褒美の言葉に俄然元氣になった現金な千幸は、無意識にミチオの首を両手で絞めながらぶんぶん揺すった。

「うっ……死にますう」

「あ、ごめん」

（天使って死ぬのか？）

疑問を持ちつつも千幸は慌てて手を離し、ミチオの次の言葉を待った。

「ふう……死ぬかと思いましたが、まったく。——えーと、そうそうご褒美の話でしたね。

まず今回は突発的な事故なので転生の輪に入って次の転生を待つのではなく、すぐに新たな人生をやり直していただくことに決定しました。ゲームで言うところの『リセット』って奴ですね。

しかもその際、神様のご厚意でかなり自由な選択肢が千幸さんに与えられます」

「自由な選択？」

「はい。生まれや容姿、特殊技能なんかですね」

「マジで？」

思わず目を輝かせる千幸に、ミチオはにこやかに笑いながらうなずいた。

「マジですよー。何かご希望はありますか？ だめなら言いますから、とりあえず何でも言ってみて下さい」

（何でもかあ……）

俯いて考え込んだ千幸は、しばらくしてやつと顔をあげた。

「……んーと、両親が揃ってて、もちろんわたし成人するくらい……ううんっ、もっとなんか生きてくれる両親ね。あとは兄弟とかも欲しいなあ」

「家族？ えーと、それだけですか？ 絶世の美女にしてほしいとか、世界一のお金持ちになりたいとかはないんですか？」

「は？ そういうの興味ないし。てかこんな普通の顔でもセクハラとか痴漢とか遭遇するんだよ？ 絶世の美女とかだと色々大変そうじゃん。それにお金はあるに越したことはないけど、それもやっぱりありすぎたら困りそう。何事も程々がいいってもんよ。あつ、なら貧乏回避は頼んでおいた方がいいのかな？ ま、別にいいか」

「千幸さんは欲がないのですねえ。といいますか本当に女子高生ですか？ なんか達観しすぎじゃないか……」

「うるさいなあ。生まれてから十八年。色々ありすぎてこんな性格になっちゃったのよ！ てか、欲がないとは言わないわよ？ やっぱあんまりお馬鹿なのや、不細工っていうのは遠慮したいし。

あつ、あとお肌の手入れがいらぬような美肌が欲しい！」

「マニアックなところありますね……」

「うっさい！ 肌は基本なのよ。玉のお肌は七難隠すって施設の院長先生が言ってたんだからっ」

「それ色白ですよ。まあ根本的には間違ってますが」

ミチオはそう言いながら、懐から手のひらサイズの白い手帳を取り出した。「容姿・生まれはおまかせ……」とつぶやきながら、開いたページにレトロな羽根ペンで書き込んでゆく。

「リクエストは美肌だけですね？」

「うん」

ふむふむとうなずき、ミチオは手帳で何かを確認したり記入したりした後、顔を上げた。

「家族構成の項目はよし……と。美肌も問題ないですよ。手入れなどしなくても、つるつるピカピカのお肌が貴女のもんです」

「やったあ！」

嬉しそうに手を叩く千幸を、ミチオは微笑ましく眺めている。

「喜んでもらえてこちらも嬉しいです。では次に特殊技能ですねえ」

「特殊技能って何？」

「運動神経とか、音楽とか芸術の才能とか、記憶能力、ずば抜けた頭脳とかでしょうか。別の世界を選ばれるのでしたら、その他に剣とか魔法なども……」

「ま、魔法!!」

魔法という言葉に千幸の目がカッと見開き、ミチオは思わず一歩後退る。

実は千幸、施設を出て一人暮らしをしてからというもの、ゲームに嵌まっていた。

もともとファンタジー系の小説などが好きだったこともあり、古いRPGゲームを友人に借りたことをきっかけに、今ではすっかりゲーマーになってしまったと自負している。

そんな千幸にとって、魔法は憧れのものなのだ。

「魔法使いになりたい！ それも色々な魔法が使えるって感じで!!」

勢い込む千幸に、ミチオは例の手帳をペラペラとめくりながら説明していく。

「魔法使いですかあ……えーと、魔力系と精霊系、召喚なんかがありますね。色々言うなら、今言ったのが全部使えるっていうのも可能ですよ」

「ま、マジですか!? もちろんそれをお願いします!!」

「魔法となると、そうですねえ……ここなんかどうです？」

「どこ？」

「サントロイメと呼ばれる、剣と魔法の世界ですよ」

「それいいっ！ 是非そこで!!」

「わかりました。では貴女の転生先の世界はサントロイメで」

「はいっ！」

先ほどまでミチオを冷ややかに見ていた千幸だが、今はまさしく神を見るかのような眼差しだ。「ただそれだけオールラウンドになると、その世界での役割も大変になっちゃうかと思いますが……」

「リアル魔法使い！ うわぁ楽しみになってきた！ 早く転生しよう！」
千幸は魔法使いという言葉に浮かれ、ミチオが小さくつぶやいた言葉をまったく聞いてはいなかった。——そこに落とし穴があるとは思いません。

「じゃあ、それ以外については神様がお決めになりますが、よろしいですね？」

「うん、おまかせでいいよ。あ、そだ。転生したらこの記憶はどうなるの？」

「千幸さんの記憶は残すことも、消すこともできますよ」

「へえ……じゃあ残しておいてほしいかも」

ミチオは千幸の言葉に驚いて目を瞠みはった。千幸の人生は決して覚えていて楽しいものではないはずだ。それなのに残しておきたいのだろうか？ と。

その問いを表情から読み取ったのだろう。千幸が口を開く。

「んー、次のわたしの人生って結構幸せそうじゃない？ 両親揃そろってるし。だからさ、覚えていた方がいいと思って。そしたら大事にできるでしょ。いろんなものを」

「千幸さん……」

照れたように笑う千幸をミチオはまぶしげに見た。

あのような『負』ばかりの人生でありながら、千幸の魂は穢けがれることなく美しい。これなら役割も十二分に果たしてくれるだろう。

それとは別にミチオは思う。平穩とはいいい難がたいであろう転生後の世界で、彼女が幸せになれるように、と。

「わかりました。千幸さんの記憶は残します。あつ、千幸さんの意識は自我が目覚める頃まで曖昧曖昧にしときますね」

「ふうん、よくわかんないけど、おまかせするよ」

「では、逝いきますか？」

「了解！」

第二章 新たな始まり

満月が窓ガラス越しに室内を照らす。

広い室内に設置された、大人が何人も寝られるような大きさの天蓋付きベッドには、三人の子供たちが寝転んでいた。

年齢と性別の違いはあるものの、三人とも濃い金髪に碧眼の、揃って端正な顔立ちをしているため、血の繋がりが容易に想像できた。

最年長は右端に寝転ぶ十歳前後の少年。兄弟中一人だけ癖のない真っ直ぐな髪を持つ彼は、幼いながらも兄としての自覚が垣間見える利発そうな少年だ。

真ん中には末っ子と思われる五歳ほどの少年。緩やかに波打つ髪と、整った可愛らしい顔立ちは兄よりも隣にいる少女の方によく似ていた。

最後は紅一点の少女。最年長の少年より一、二歳年下と思われる彼女は、勝気そうな強い光を放つ瞳と、生き生きとした表情が魅力の美しい少女だった。

「ジーン兄様、お母様は大丈夫かしら？」

「心配ないよ、アマリー。きつともうすぐ僕らに可愛い弟が生まれてくるさ」

妹の心配そうな声に、ジーンは安心させるように笑った。その声に半分まどろんでいた弟のユア

ンが、あくびまじりで口を挟む。

「ねえ赤ちゃんは男の子なの？」

「あら、きつと女の子よ」

「いや男だと思うな」

「女よ！」

気の強いアマリーは、ニヤニヤと笑うジーンに食ってかかる。

そんな二人を見ながら、のんびり屋のユアンは楽しそうにつぶやいた。

「僕はどっちでもいいなあ。それでいっぱい可愛がるんだ」

その言葉にジーンとアマリーは喧嘩をやめると、同意するように大きくうなずいた。

「どっちにしても僕たちが守ってあげよう」

「そうね」

「うんっ」

兄弟たちがうなずき合った時、にわかに廊下が騒がしくなった。

「ひよつとして？」

「かもっ！」

パパパタと行き交う足音に、兄弟はお互いの顔を見合わせるとベッドを飛び出した。

三人が廊下に出ると、メイドたちが慌しく廊下を行き来している。

その様子に声をかけることもできず佇んでいた三人だったが、こちらに歩いてきたふくよかで優

しそうな女性——子守のマーサが彼らに気づいた。

「あらあら、皆様、起きてらっしゃったんですね」

「マーサ！」

パタパタと近づいてくる子供たちに微笑みかけると、マーサは視線を合わせるためにその場に膝をついた。

「ちょうど呼びに参ったのですよ。皆様、ご一緒にいらしたのですね」

「うん。ユアンと一緒にいてほしいって頼むから」

「だって、母様が……」

からかいを含んだアマリーの言葉に、ユアンは頬を膨らませて口ごもった。

マーサはそんなユアンの頬へ優しく手を当てると、満面の笑みを浮かべて告げた。

「奥様は大丈夫ですよ。先ほど妹君がお生まれになったのです」

その知らせに、三人は顔を見合わせて歓声をあげた。

マーサは三人のその様子を微笑ましく見つめた後、にこやかに訊いた。

「さあ、お母上様と妹君にお会いになられますでしょうか？」

「うんっ」

「では、参りましょう」

三人は揃って元気よくうなずくと、マーサと共に母のいる寝室へと歩き出した。

廊下の端にある両親の主寝室に近づくと、「おぎゃあ」という甲高い赤ん坊の泣き声が三人の耳にも届いてきた。

「赤ちゃん泣いてるよ」

「ほんとだ」

心配そうなユアンとアマリーの様子に、マーサはクスクスと笑うと、安心させるように声をかけた。

「赤ちゃんは泣くのがお仕事なのですよ。それに大きな泣き声は元気な証拠なのです」

「じゃあこの子はすぐ元気だね！」

三人はマーサの言葉に安心すると、今度はワクワクしながら両親の寝室に足を踏み入れた。

「おやおや、全員起きていたのかい？」

パタパタと部屋へ入っていった三人は、すぐにそう声をかけられた。

声の主は、彼ら三人の父であるアイヴァン・クレイ・リヒトルーチェ公爵。彼は眼鏡をかけた端正な顔に穏やかな笑みを浮かべながら、天蓋のあるベッドの傍らに立っていた。

そのベッドには、疲れは見えるものいつもと同じ綺麗な母ミリエルの姿があり、三人はホッと安心して顔を綻ばせた。

「父様！ 赤ちゃんを見せて！」

「母様、大丈夫？」

「赤ちゃんどこ？」

三人三様の言動に苦笑しつつ、アイヴァンは三人を手招きした。

「ここへおいで」

それを合図に我先にと彼に近づいた三人は、母親のベッドの横にある小さな寝台をとり囲んで中を覗きこんだ。

そこにはすやすやと眠る赤ん坊の姿。生まれたばかりだというのに肌はうっすらとピンク色がかった白磁で、ふわふわとした髪はこの世界でも珍しい銀色だった。

「可愛い！」

「さっきまで泣いてたのに、もう寝てる」

「天使みたいだね」

「お母様と同じ銀色の髪だわ」

「目は何色かな？ 僕たちと同じかな？」

「きつと母様と同じ緑だよ」

興奮して一斉に口を開いた後、今度はうつつとりと生まれたばかりの妹を見つめる三人に、両親はそつと微笑みを交わす。

三人の子供たちは、皆父親譲りの濃い金髪と青い目を受け継いでいる。だが生まれたばかりの彼女は唯一母親似の銀髪だった。

「父様、この子の魔力すごいね……」

じつと末の妹を見つめていたジーンが父を振り返りながら言った。同じく強い魔力を持つ身だからこそ気づいたのだろう。

「ああ、クレセニア随一と言われる、リュシオン王子にも匹敵するかもしれないな」

「リュシオン殿下にも？ ……それって大変なことなんじゃ」

驚く長子に、アイヴァンは重々しくうなずく。聡い息子はそれがどんなに大変なことかわかったらしい。

アイヴァンはそんなジーンの頭に手を置くと、他の二人にも視線を合わせ、真剣な表情で口を開いた。

「いいかい？ この子には平凡な人生は望めないかもしれない。だが幸せな人生にすることはできる。私とミリエルはそのための努力を惜しまないつもりだ。だからおまえたちも妹を精一杯愛してやってほしい。そうすればきつとこの子は幸せになれるだろう」

父の言葉に三人はそれぞれ顔を見合わせてから、しっかりと父にうなずいた。

「僕たちさつき誓い合ったんだ。皆でこの子を守るって」

「そうよ、わたしたちの妹だもの」

「僕もこの子を守るよ！」

三人の言葉にミリエルは思わず涙ぐむ。

「どうかこの子の行く末が幸せでありますように……」

母のつぶやきは、そこにいるすべての人の願いだった。

そしてそれは赤ん坊の魂の中に眠る、千幸の耳にもしっかりと届いていた。

(ありがとう、神様。こんな家族をわたしにくれて)

まどろみの中、赤ん坊の中で眠る千幸は幸せそうにつぶやいた。そしてまた優しいまどろみに身を委ねるのだった……

その日クレセニア王国にて、王家にも繋がる名門貴族、リヒトルーチェ公爵家の末娘として生まれた赤ん坊は、ルーナレシア・リン・リヒトルーチェと名づけられた。

彼女の新たな人生はまだ始まったばかり——

十

「ルーナ」

そう呼ばれることにも慣れてきた。そんなことを思いながらルーナレシア——ルーナは呼ばれた方向へと顔を向ける。首のみを動かすだけの動作だが、生後三ヶ月のルーナにしてみればそれもやっと最近できるようになったばかりだ。

眠くてたまらない日常を過ごしながらも、少しずつ周りの様子がわかってきたルーナこと、前世、高崎千幸。

最初は起き上がることはおろか首さえ動かせない状況に、寝起きでぼんやりしたままの彼女は、肢体不自由にもなったのかと焦り、大泣きしてしまったものだ。

そしてそんな時は、すぐに飛んできた母ミリエルや、子守のマーサ、そして時には父アイヴァン

に抱き上げられて慰められるのが常だった。

ルーナ、ルーナ様と呼ばれて抱きしめられると、彼女はそこでやっと自分が無力な赤ん坊だと気づくのだった。そしてすぐにまたまどろみに引き寄せられてゆく。

「まあ起きてたのね」

そう微笑み、ミリエルは赤ん坊用の寝台からルーナを抱き上げた。

「ミルクの時間だものね」

ミリエルの言葉が耳に入った途端、ルーナは内心青ざめる。

いくら現在母乳が必要な赤ん坊とはいえ、中身は元十八歳なのだ。授乳は恥ずかしい。というか拷問だ。

（あああ、無理！）

パタパタと手足を動かして抵抗を示すのだが、ミリエルは「あらあら、待ちきれないのね」とその綺麗な胸元を早速あらわにしようとする。

（うわあ、女同士だけど……女同士だけとお）

恥ずかしさに耐え切れなくなったルーナは、意識を逸らすように自分へと暗示をかけた。

（寝るっ、眠ってしまえっ！）

そうやって目を閉じることをイメージすれば、彼女の意識はすうっと遠ざかって、まどろみの中に引き込まれていくのがわかる。

そんな千幸の意識とは別に、実際のルーナはぼちりと目を開けて授乳されているのだ。

この方法は、生後まもなく恥ずかしさに耐えかねた千幸が編み出した対処法だった。

まだ自我のない赤ん坊ゆえに、根底にある千幸の意識がなくても、身体はその本能で行動するらしい。これは次に目が覚めた時に、ちゃんと空腹が満たされていることで証明済みだ。

千幸の記憶を残したまま転生したものの、自我のない赤ん坊にきちんと考えることができる千幸の意識があるのは不都合なことも多い。ミチ才が言っていた意識を曖昧あいまいにしておくというのが、そのための救済策なのだろう。

こうして、曖昧に浮き上がってくる千幸の意識の中で、彼女はルーナという自分と、その周囲に慣れ、日に日に『リセット』した人生に違和感を感じなくなっていた。

生後半年くらいになると、やっと授乳が終わり離乳食に切り替わった。もちろんルーナは嬉々として離乳してみせた。ミリエルの方が逆に寂しそうにしたほど、あっさりとした。

ルーナは知る由もなかったが、この世界の高貴な女性は一般的に乳母を雇い、自ら子供を育てることをしない。そういった意味ではミリエルは珍しいほどに子供たちを慈しんでいる女性だった。

「ジーンたちを離乳食に切り替えさせるのは大変だったのに……」

ポツリとつぶやかれたミリエルの言葉に、ルーナは思わずギクリとする。

そして前世での施設時代に、乳幼児の世話をした経験を出し、赤ん坊としてどこかおかしくなかったかと自問する——実はこの育児経験が大いに役立ち、ルーナはこのエセ赤ん坊ライフでボ

口を出さずに済んでいるのだった。

(さすがに中身が十八歳とかばれるのはね……)

奇異な目で見られることも嫌だったが、それで両親や兄弟きょうだいたちを心配させることになるのはもっと嫌だとルーナは思う。

(中世の魔女狩りみたいなのがこの世界にないとは限らないし……考えすぎかも知れないけど、どちらにせよ悪目立ちしない方が賢明だよ。家族のためにも)

すでにこの短い期間で、ルーナにとって彼らはかけがえない存在になっていた。

家族という存在を知らなかった前世があることで、余計に彼らが大切なのだと実感する。そのため彼らに迷惑をかけるくらいならば、エセ赤ん坊ライフを押し通すことなど苦ではなかった。

(でも離乳だけはしよう。あれはもう精神的ダメージが大きすぎる……)

一人うんうんとうなずきながら、エセ赤ん坊のルーナは誓うのだった。

それからの日々も、千幸としての記憶や知識、大人たちが交わす会話を聞くことなどによって、彼女は順調に赤ん坊ライフを過ごしてゆく。

(結局、名前が『千幸』から『ルーナ』になっただけなんだよね)

そう納得した彼女は、ルーナとしての自分をしっかりと受け入れていったのだった。

そしてルーナが誕生し、九ヶ月が経った頃。

その日、ルーナはマーサに抱かれて屋敷の庭へと出た。

キャッキヤと走りまわる兄妹たちを、ルーナは庭の芝生に敷かれたブランケットの上で大人しく座って眺めていた。

繊細なレースを襟に使った、白いベビードレスのルーナは本当に愛らしく、大人しく座っている様子を横目で確認したマーサは、とろけそうな顔で目を細めた。

（それにしても美少年に美少女だなあ、わたしの兄妹たちは。というか父様と母様も美形だから当たり前か。ほんとこの家族って美形揃いで目の保養だ。まあ最初は『美形外人だっ！』とか思ってた両親や姉妹って言われても違和感がめっちゃあつたわけだけど）

ぼんやりそんなことを思っていると、ふとルーナは気づく。

（そういえば、鏡見たことないよね。他の人の話から銀髪、緑の目っていうのはわかるけど。わたしの顔ってどんな感じなんだろう？ ま、あの両親の子供だし、大抵の人に可愛いって言ってもらえるから、不細工っていうのは違うと思うけど。でもそうなる気になると気になるもんよね）

特に容姿に関してのお願いはしてなかったが、神様のサービスでもあったのかもしれないと思うと、ルーナは無性に自分の容姿を確認したくなった。

ちらりとマーサを見ると、いつもルーナが大人しくしているためか、安心して彼女に背を向け、近くに運ばれてきたガーデンテーブルに兄妹たちのおやつを用意していた。

ルーナはキョロキョロと辺りを見渡し、さほど遠くない場所に小さな池を見つけた。そしてもう一度マーサの様子を確かめる。

（んー、ちょっと遠いけど、あのくらいなら行けるかな？）

小さな池との距離を目で測りながら、彼女はそんなことを思う。

最近ハイハイができるようになったので、短い距離ならば誰かの手をわずらわせることもなく、一人で行動できるようになっていた。

（『池に行く』なんて、しゃべれないから説明もできないし、あれくらいならすぐ戻ってくれば平気よね）

ルーナは一人納得すると、ハイハイで池を目指すべく行動を開始した。

ゆっくりと四つん這いで進むルーナだったが、池まで続く柔らかな芝生のおかげで、手のひらや膝もさして痛くはない。

（ハイハイっていうのがちょっと情けないけど、自分で動けるっていうのはいいね）

ルーナはご機嫌で這い続ける。最初はすぐ近くと思われた池だったが、赤ん坊である自分を考慮に入れてなかったため、その距離を進むのは意外と大仕事だった。

さすがに疲労を感じながらも、なんとかルーナは池の岸辺に辿り着いた。

（やるじゃん、わたし！）

自画自賛しながら、ルーナは池を覗き込む。

揺れる水鏡に自分らしき赤ん坊が映ると、ルーナはその体勢のまま息を止めて凍りついた。

（な、なんだこれっ！）

水面に映る自分の顔が、驚愕の表情を作る。

皆に言われていたような、銀の髪、緑の瞳の赤ん坊。まず、聞くのと見るのでは大違いなその派

手な色彩の組み合わせに驚く。さらにその顔立ちのあまりの整いように言葉を失った。

(可愛いどころか、このまま成長したらとんでもない美少女じゃん！ これ、サービスなんて域は軽く超えてるよ、ミチオ……)

思いもよらない自分の美しい顔立ちに、ルーナは呆然とするしかなかった。やがて気を取り直した彼女は、再度池を覗き込む。そしてそこに映る自分に思わず見惚れてしまったのだった。

ルーナに自己陶醉ナルシシズムはない。しかし今まで自分の姿を確認したことがなかったルーナにとって、そこに映る姿は他人のようなものだった。それも天使のように美しく愛らしい赤ん坊の姿なのだから、思わず見惚れてしまうのも仕方がないだろう。

(やばい、このままだとわたしナルシスト決定!? うっ、さすがにそれは嫌だ)

ルーナは水面を見ながら、「これは自分、これは自分」と呪文のように繰り返した。

なんとか自己暗示に成功し、水面に映る自分から視線を逸そらした時だった。ツルリと小さな手が芝生の草で滑り、彼女の身体は前のめりに池へと突き出される。

(あっ！)

そう思った時にはなす術すべもなく、ルーナはそのまま池の中へダイブしていた。

——バシャンッ

水音と共にルーナの全身が冷たい水に包まれる。

(不幸体質改善されたんじゃないかなかったのお!!)



心の中でそんな叫びをあげている間にも、ルーナの身体はゆっくりと沈んでゆく。彼女は咄嗟に息を止めたものの、小さな肺はすぐに悲鳴をあげ、苦しくて目を閉じた。

(ううっ、誰かつ！)

そう助けを求めた時だ。

『可愛いお姫様。落ちてしまったのね』

不意に聞こえた声——というより頭に直接響くもの——に、ルーナは驚きで目を開けた。

それと同時にためていた空気を吐いたルーナは、その反動で水を飲んでしまい、さらにパニックに陥る。

『大丈夫。今助けてあげるから』

優しくそう言われた瞬間、ルーナをしゃぼん玉を思わせる丸い球体の泡が包んだ。驚きでまたしても口を開けてしまったルーナだが、今度口に入ってきたのは水ではなく新鮮な空気だった。

(息ができる……?)

『ふふふっ、お転婆は程々にしなければだめよ、お姫様』

目に見えない誰かが楽しそうにそう告げると、泡が水の中をゆっくりと浮かび上がってゆく。

水上にあがると、彼女を包んでいた泡はすぐに消えてしまった。代わりに水面の穏やかな波がゆらゆらとルーナの身体を持ちあげたまま岸へと運んでゆく。

やがて池の岸に辿り着くと、波はゆるやかに盛り上がり、地面に彼女を優しく置くとすぐに何事もなかったかのように引いていった。

(な、何、今の?)

呆然とするルーナに、遅まきながら事態を知った兄弟やマーサが駆け寄ってきた。

「ルーナ！」

「ルーナ様！」

池の岸辺に座り込むルーナを、駆け寄ってきたマーサが力いっぱい抱きしめる。

「ああ、ルーナ様、申し訳ありません」

涙を流して謝るマーサを見て、ルーナは途端に激しい後悔に襲われた。

軽い気持ちで行動して、彼女を泣かせてしまった。「ごめんなさい」と言えない赤ん坊の自分が齒がゆくて涙が溢れた。

ルーナはマーサのふくよかな胸に包まれ、泣きながら心の中で詫びる。

慰めるように何度も兄妹たちに背中を撫でられていると、疲労も相俟ってルーナはやがてマーサの腕の中で眠りに落ちていった。

「マーサ泣かないで。ルーナは無事だったんだから」

泣き止まないマーサをアマリーが必死で慰めると、彼女は腕の中でやすやすと眠るルーナを見、続いて心配そうに自分を見上げる子供たちを見て、やっと小さく微笑んだ。

「はい、申し訳ありません。アマリー様」

ホッとした空気が流れたところで、マーサの横に座り込んでいたユアンが口を開いた。

「ねえ、ルーナは池に落ちたのに、なんで濡れてないのかな？」

ルーナのベビードレスを触りながら、ユアンは不思議そうに兄を見た。

確かに彼の言う通り、池に落ちたはずのルーナ本人はおろか、その着ているドレスもまったく濡れてはいなかった。

「池に落ちてなかったってことはないよね？」

「そんなはずないわ！ 水面から浮き上がってきたのを見たもの」

「僕もだよ、だから不思議なの」

アマリーもルーナのドレスを確認するが、やはり湿ってさえなかった。

その様子に一人難しそうな顔をしていたジーンは、確信がないのか自信なさげに答える。

「水の精霊のせいかも。精霊は気に入った人間に〈加護〉を与えるから」

(類い稀な魔力に、精霊の加護か……)

聡明な少年は、妹の行く末を思うとその顔をひっそりと曇らせた。

+

控えめなノックの音に、書斎で書類の整理をしていたアイヴァンは手を止めてドアを見た。すぐさま控えていた家令のコンラッドがドアを開くと、顔を出したのはアイヴァンの長子であるジーンだった。

「父様、少しよろしいですか？」

息子の言葉にアイヴァンはうなずくと、コンラッドに目配せする。すると心得た家令は一礼した後すぐさま部屋を出ていった。

「どうした？ ジーン」

息子を書斎のソファに座らせると、アイヴァンは自分もその向かい側に腰を下ろした。

「実は昨日のことなんですが……」

「ああ、マーサから聞いている。彼女のことを心配だったのか？」

アイヴァンは息子の深刻な様子にあたりを付けて尋ねた。

昨日ルーナが池に落ちたことを報告してきたマーサはかなり取り乱していた。子守として失格なので解雇してくれとまで言ってきて、アイヴァンの方が困ってしまったほどだ。

「マーサは辞めさせられてしまうのですか？」

心配そうに尋ねる息子に、アイヴァンは首を振って答えた。

「いいや、こんなことが二度と起こらないように注意はしたが、辞めさせるつもりはない。おまえたちも慕っているし、マーサほど有能な子守はいないからな」

「よかった」

「ルーナがあまりに聞き分けのいい赤ん坊だから失念していたが、赤ん坊は本来突飛なことをするものだ。今後はマーサも気をつけるだろうし、こんなことは二度と起こらない」

「はい。僕も今後はもっとしっかりルーナを見ることにします」

「そうだな。ところで話はそれだけか？」

マーサの進退を聞いても、硬い表情のままの息子を不思議に思い尋ねると、ジーンは躊躇ちゅうちゅうした後話し始めた。

「ルーナのことなんです」

「ルーナの？」

訝いぶしげな父に、ジーンはコクンとうなずく。

「父様。ルーナが池に落ちた時、まるで水があの子を返すように水面が浮き上がって、池の岸まで運んだんです。あれって精霊の仕業じゃないかなって……」

「……………」

「それに、岸が上がったルーナの衣服は全然濡れてなかったんです」

ジーンは黙ったままの父を不安げに見上げる。

やがてアイヴァンはゆつくりと口を開いた。

「人に無関心なはずの精霊が加護を与えるか……。まったくルーナはつくづく規格外らしい。尋常ならぬ魔力に、精霊の加護。まだ何かあったとしても最早私は驚かぬよ」

「父様、ルーナは大丈夫なのでしょいか？」

魔法王国と呼ばれるクレセニア王国では、魔力があること自体は誇れこそすれ、困ることではない。だがそれが、明らかに尋常ではない強大なものだとすると話は違ってくる。

その力を利用しようとする者や、恐れる者。様々な思惑が絡んでくることは容易に想像できた。

それによって狙われる可能性も――

リヒトルーチェ公爵家の姫という立場は、ある程度の盾にはなる。しかしそれでも絶対かつ万全なものではないのだ。

また精霊の加護を受ける者は、精霊使いの素質があると言われている。

精霊を使役できる者があまりにも希少なため、その存在自体が奇跡と呼ばれる精霊使い。

そのため彼らは崇められる一方、力の大きさに恐れられてもきた。実情を知るアイヴァンにとっては、ルーナがその希少な才に恵まれていることは、手放して喜べるものではなかった。

「ルーナも今ただの赤ん坊だ。だが、いずれその存在は隠せなくなる。それまでに我々で何ができるのか考えよう」

「はい。僕らの大事な家族だから守らなきゃ」

「ああそうだな」

力強くうなずく息子に、アイヴァンは頼もしげに微笑ほほえんだ。

十

緩やかに、優しく時は流れる。

人生を『リセット』し、異世界に転生した千幸ことルーナは、三歳の誕生日を迎えていた。

クレセニア王国、王都ライデルにある広大なりヒトルーチェ公爵家の本邸。その一階の中庭に面した図書室は、子供たちの学習室としても使われている。天井まである書棚には、びっしりと隙間なく本が置かれ、部屋の中央には大きな長方形のテーブルと椅子。窓際にはゆつたりとしたカウチの他に、ロッキングチェアも用意されている。その他にも星空を描いた天球儀や、世界地図が貼られた衝立^{ついで}、さらに珍しい他国の民芸品などもあちこちに飾られていた。

そんな遊び心も満載な図書室のテーブルで、ユアンと彼の魔法の教師、トールが向かい合っていた。「前回まで治癒魔法の基本をお教えしましたが、今日からは防御魔法^{プロテクト}について学びます」

「はいっ」

素直に返事をする教え子に、教師は満足げにうなずいて続ける。

「まずは基本の防御魔法を勉強しましょう」

そう言う教師はテーブルの端に飾られていた花瓶を、中央へと持ってきた。

「この花瓶の周りに防御障壁を張りめぐらします——『ラノア・リール』」

教師である魔法使いが呪文を唱えると、一瞬花瓶の周りに透明な箱が現れて白く光った。

すぐに見えなくなつた防御壁だが、ユアンが花瓶に触れようとすると不可視のガラスがあるかのようにその手が弾かれた。

「これは一番単純な防御魔法です。『ラノア・リール』は古代魔法言語^{エンシェントマジック}で障壁を意味し、すべての防御魔法の基本の言語となる呪文^{スペル}なのです。高度なものになれば、様々な効果を付加できるように

なるので、しっかりと使いこなせるようにならねばなりません」

「はい、先生」

「では集中して呪文の詠唱を」

ユアンは教師の合図にうなずくと、真剣な表情で魔法を唱えた。

サンクトロイメで最も一般的な魔法は、かつて存在した古代魔法文明の流れを汲む古代魔法言語を使用したものだ。

魔法言語、または魔法語とも呼ばれる古代魔法言語は、言葉ひとつひとつに意味があり、力が宿っている。

その言葉に宿る呪い^{まじな}を媒体に、自分の魔力を発動させ、様々な事象を起こすのが魔法だった。

『ラノア・リール』

ユアンが呪文を唱えると同時に、先ほど教師が見せたような、完璧な防御魔法が花瓶の周りに張り巡らされる。

その瞬間、鈴を鳴らしたような愛らしい声がユアンと教師の耳に届いた。

「わあっ、しゅごーい」

驚いて二人が声の方を見ると、いつの間にか目をキラキラさせたルーナが図書室の入口に立っていた。

「ルーナ？」

「ユアン兄しゃまあ」

トコトコと近寄ってくるルーナの姿は、まさに小さな天使。まっすぐな銀髪が揺れ、水色のモスリンドレスの背中にある大きな白いリボンが、まるで羽根のように見える。

ユアンは近づいてくる妹を抱き上げると、自分の膝に乗せた。

「ルーナどうしたの？ 勝手に出歩いたらマーサが心配するよ」

「ごえんしやい」

ペコリと頭をさげるルーナに、妹も弱いユアンはそれ以上何も言えず苦笑する。

「しえんしえい、邪魔しないから、いいいい？」

コテンと首を傾げてお願するルーナに、魔法研究一筋の朴念仁教師もあっさりと陥落した。

「もちろんですよ、ルーナ様」

（さすがはルーナ。あの厳しいトール先生も逆らえない……）

そんなことを兄が思っているとは知らず、ルーナはワクワクと授業の続きを待っていた。

ユアンが教師と共に防御魔法の練習をしている横で、ルーナは彼の教科書とも言える魔法書を眺めていた。

最初は魔法の練習に興味津々だったルーナだが、精度を高めるために何度も繰り返すのを眺めているばかりではさすがに飽きる。そこで目の前に置かれていた兄の魔法書を読むことにしたのだ。

もちろんルーナがそれを読めるとは思いもしない二人は、彼女が本で遊んでいるくらいに認識だ。パラパラとページをめくるフリを繰り返して、兄たちの注意が逸れたのを見計らってじっくり読み始める。

（神様の贈り物である特殊能力のせいなのか、読み書きに苦勞しないのは助かるなあ）

ルーナには、ありがたいもの、ありがたいものを含めて、いくつもの贈り物が、知らない間に付与されていた。

やたらと美少女な容姿、前世より優れている記憶力に加え、この世界の言葉や文字が理解できる能力などだ。また確認できていないだけで、他にも何かあるかもしれないのが怖いところだ。

もともと身体の動きは一般的な子供と変わらない。そのため三歳児らしからぬ言動はするものの、舌がまわらないため彼女の喋り方は舌足らずで愛らしい。

この舌足らずが、ルーナを年相応に見せているのを自覚しているので、彼女はあえて直そうとも思わなかった。そしてそれは、いずれ直るというのも理由にあるのだが。

（なにに『魔法は基本的に二つの系統から成り立つ。攻撃、そして攻撃補助の魔法を黒魔法といい、一方防御や強化補助、治癒の魔法を白魔法という。これらすべての魔法は古代魔法言語の呪文を媒体に、自身の魔力で様々な現象を起こすことができる』か。ふうん呪文ねえ。言葉って感じよね。意味のある言葉で魔法発動って）

魔法使いになりたくてこの世界に転生したルーナ。すっかり魔法書にのめり込んでいた。

（わたしも早く魔法習いたいなあ。勉強は嫌いだけど、魔法使いになるためならすつごく頑張るのに。魔法の才能があるのはわかってても、使い方がわかんないや使えないし。あーあ、ユアン兄様いいなあ。話を聞く限りじゃ魔法の勉強は五歳ぐらいいからっていうし、まだまだ先かあ）

うーんと唸りながら魔法書を覗みつけるルーナに、トールが気づいて声をかける。

「ルーナ様、そろそろお部屋に戻られますか？」

（あ、飽きたと思われたのかな？）

むしろもつと読み耽ふけっていたかったが、怪しまれるのは厄介なので、ルーナはコクンと素直にうなずいてみせた。

「お部屋に帰りましゅ。しゅんしゅい、兄しゃま、お邪魔してごえんしゅい」

「いいですよ、ちつとも邪魔じゃありませんでしたし」

兄の膝から降りてルーナが舌足らずな口調でそう言うと、相好を崩したトールはにこやかに返した。

ルーナはにっこり笑って兄と教師に小さな手を振ると、トコトコと歩いて図書室を出ていった。

パタンと図書室のドアが閉まると、ルーナはドアを背にその場に立ち止まる。

（魔法の勉強かあ……兄様なら味方になってくれる？）

くると振り返ると、ルーナは閉じられたドア越しのユアンにそう心の中で尋ねた。

十

それから数日後、しとしとと絶え間なく雨の降る日。

母ミリエルの部屋で過ごしていたルーナは、窓際に置かれたソファに座り、膝の上に革装丁の大きな本を広げていた。

もつとも本はそれだけではなく、テーブルの上にも様々な種類のものが所狭しと置かれている。

現在彼女が広げている本の表紙には、『植物図鑑』と金の題字が押されている。

文章よりも図解が多いため、描かれた絵を楽しんでいるのだらうと周囲は思っていたが、三歳にして読み書きに不自由しないルーナは、実際は文章の方もすっかり熟読している。他にも子供向けの地理・歴史書に始まり、動物図鑑といったものまでも読破済みだった。

それらの知識で得た情報をまとめると、地球とは異なるこのサンクトロイメという世界のことか少しわかってくる。

サンクトロイメには、大陸がふたつある。

ひとつはフォーン大陸といい、羽根を広げた鳥の形をした、地図の大半を占める大きな大陸だ。

もうひとつは北にあるネビュリンド大陸で、フォーンに比べると三分の一ほどの大きさであり、

こちらは魔物と魔族の住処と言われる極寒の大陸のため、人が住まうことはできない。ここには昔、魔王が封印されたとか、古代魔法文明が栄えていたなど様々な伝承があるらしい。

サンクトロイメに最も多く存在する種族は人間で、髪色の多彩さと、魔力マナと呼ばれる不思議な力を有している者が多く存在することを除けば、地球と何ら変わりはない。

また亜人あじんと呼ばれる、獣に近い姿を持つ者たちも存在するが、彼らは大陸外の島々に住む者が多く、フォーン大陸で見かけることは稀まれだった。

生息する動植物については、異世界ならではの納得できるようなものも存在すれば、地球でも見

かけるようなものも多く存在した。もつとも同じと言ってしまえば語弊があるかもしれないが。

例えば赤い林檎もあるが、葡萄のような紫色の林檎もある——ちなみにその味は梨そのものだ。

(時代とかはともかく一番地球と違うのは、魔法があること、魔物とかが存在することかなあ)

そんな風にルーナが思う通り、多少の違いはあるもののその生活様式は地球の中世から近代あたりのヨーロッパに近い。電気といった科学的なものは発達しておらず、その代わり組み上げられた魔法によって動く魔法具マジックツールという便利用品が存在する。

もつとも魔法具は高価なもので、庶民レベルにまで普及している品は少ないのだが。

ルーナが本を眺めながら思いを馳せていると、ノックの音が彼女の耳に届いた。コンコンコンツという親愛を示す三回の合図に、それが母にとって親しい人物——つまり彼女にとつても親しい人であることを知る。

ミリエルは手にしていた刺繍道具をテーブルに置くと、「どうぞ」とドアへ向けて声をかけた。すると待ちきれなかったように勢いよくドアが開き、アマリーとユアンが部屋へ飛び込んできた。

「やっぱりルーナここにいたあ！」

アマリーは元気良く声をあげると、パタパタと駆け寄ってルーナの横に腰掛ける。一方ユアンはニコニコしながらのんびりと近づいてきた。

「あらあら、二人とも勉強はどうしたの？」

部屋の時計を確認してから、ミリエルは咎めるように二人に問いかけた。

「今日は先生が私用でいらつしやらないからお休みだもの」

「そんなこと言って、また授業をさぼったんじゃないでしょうね？」

「母様、ほんとに先生はお休みなんですってば」

「本当なんだよ」

アマリーを助けるようにユアンが口を挟むと、ミリエルはクスクスと笑いながらうなずいた。

「それなら良いけど、貴女あなたももうすぐレングランド学院に入学するのですから、しっかりと勉強しておかないと入学早々付いていけなくなりますよ」

「あーあ、レングランドに入るより、わたしはお家で家庭教師に教えてもらう方がいいのにな。だって入学したら週末しか家に帰れないし……」

母の言葉に、アマリーは大きめに嘆いてみせた。

レングランド学院とは王都ライデルにある王立学校のひとつだ。

身分の貴賤きせん、年齢にかかわらず広く優秀な人材に門戸を開いており、魔法のみならず様々な学問を学べる国内最高学府である。また、ライデルが学術都市と言われるようになった学校でもあった。さらに学校と同じ敷地内に建つレングランドの学術研究施設では、魔法学、医学、工学、農学などの様々な研究がなされており、その研究結果が国を榮えさせている。

レングランド学院への入学資格は十歳以上であることで、また全寮制のため学院に入学すれば週末しか自宅に帰ることができなくなる。もつとも遠方の生徒などはそれも叶わず、年に数回の帰宅になる者も多い。

すでにジーンは学院に入学して一年になり、やはり平日は寮で過ごしている。

アマリーもそうなるのかと思うと、ルーナも寂しさがこみ上げてきた。

「姉しゃまに毎日会えないのは、わたしもしゃみしい」

しゅんとルーナが項垂れると、アマリーは感激したのかルーナをぎゅっと抱きしめた。

「大丈夫よ！ 必ず週末には会いに来るから！ それに入学するまでは毎日一緒よ」

「あい、姉しゃま」

「ふふっ、アマリーは本当にルーナが大好きなのね。……そうだわルーナ！」

「なあに母しゃま？」

「貴女からアマリーに、勉強を頑張るように言ってあげたらどうかしら？」

「母様あ……」

情けない声を出したアマリーに、ミリエルは上品な笑い声で応える。

「姉様、そんなんじや学院に入学した途端、ジーン兄様が心配して付きっ切りで監視するよ」

「うっ……それは勘弁してほしいわ」

「ふふ、そうね、ジーンならきつとそうするわ」

クスクスと笑い合うミリエルとユアンに、アマリーはしかめっ面を返す。そんな中、突然ルーナが口を開いた。

「母しゃま、わたしも勉強したい！」

「え？」

ルーナの宣言に、ミリエルをはじめ、ユアンとアマリーも驚いて顔を見合わせた。

「あのね、わたちまほーちゆかいになうの。だから勉強しゆるのよ」

真面目な顔でそう宣言するルーナを、ミリエルは困った顔で、アマリーはびっくりしたまま見ている。そんな中ユアンだけが笑顔を浮かべてルーナの頭を撫でた。

「この間、僕が勉強してるのを見てたから？」

「うん。兄しゃまみたいにまほーをちゆかいたいの」

「ルーナはまだ三歳じゃない。だめよお」

ユアンとルーナの会話にアマリーが口を挟む。

未熟な魔法は暴走の危険を伴う。幼い年齢もさることながら、ルーナの魔力が強大なのを知っている家族だからこそその心配だった。

「簡単な治癒魔法あたりなら問題ないんじゃないかな？ 僕のところに入門書があるよ」

「でも……」

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ。ルーナの魔力はすごいけど、まだこんなにちっちゃいから難しい魔法は身体が付いていかないと思う。それに僕が傍で見てるなら平気じゃないかな」

姉の心配を、ユアンは穏やかに払拭する。さらにそれを後押ししたのは、それまで黙って見ていたミリエルだった。

「そうね……それならいいかもしれないわ。せっかくこの子がやりたいと言ってるのですもの。本人のやる気を摘むのはよくないわね」

「そうだよ、勉強嫌いの姉様と違って、ルーナは自分から勉強したいって言ってるんだし」
 ミリエルの言葉にユアンはこぞとばかりにニヤリと笑って付け足した。もちろんその言葉のすぐ後にアマリーの鉄拳がユアンを襲ったわけだが。

「兄しゃまらいじょうぶ？ 姉しゃま、兄しゃまをいじめちゃだめでしゅー！」

ルーナは自分の味方をしてくれた恩もあつてか、すかさずそう言いアマリーを窘めた。

腰に手を当て指を突き出すルーナに、兄姉たちはコクコクとうなずきながら顔をとりけさせた。

一方ルーナの方は、「やったあ！ ついに魔法解禁だあ!!」と念願が叶ったことに内心狂喜乱舞していた。頭の中ではすでに伝説の魔法を唱える自分を妄想してにやついている。

こうしてまだ三歳ながら、ルーナは兄について魔法の勉強を始めることになったのだった。

十

次の日の昼下がり。

ルーナはユアンの話す言葉を一言たりとも聞き逃すものかと、身じろぎもせずじつと彼を凝視していた。その鬼気迫る様子に、のんびり屋の兄も気圧されながら妹に声をかけた。

「ル、ルーナ？」

「なあに、兄しゃま」

「そんなに見られるとやりにくいよ」

「……はあい」

兄の困った様子に、ルーナは睨みつけるような視線を解いた。

「じゃあ、いい？ まずは見本を見せるね。この魔法語は治癒魔法の基本なんだ」

そう言つてユアンは目を閉じると、おもむろに呪文をつぶやいた。

『サザール・ディア』

詠唱と共にユアンの左手の上に白い光が灯される。ルーナがその暖かな光に見とれていると、ユ

アンは彼女の手を右手で取つて光に近づけた。

「あつたかあい……」

囁くルーナにユアンは優しい微笑みを浮かべた。

「『サザール・ディア』は魔法語で癒しの光を意味するんだ。この光の源はね、詠唱者の魔力なんだよ。傷を負ったり、身体の弱つたものにこれを分け与えて治癒するんだ」

「はあい」

ユアンの説明に大真面目にうなづくルーナ。ユアンはそんな彼女に合わせて先生ぶつてみせる。

「じゃあ、まずはルーナもやってみようか」

「うんっ」

「僕に続いて唱えてみて——『サザール・ディア』」

ユアンに続いてルーナは呪文を口にする。

『しゃじゃーる・ディア』

刹那、ルーナの頭に二つの文字が浮かぶ。古代魔法言語だ。それが浮かんだ途端、ルーナの指先にぼおっとぼやけた白い光が現れた。

「あっ……」

ルーナが驚きの声をあげる。だが光はすぐにその指先から消えてしまった。
(ま、魔法だ！ 魔法が使えた！)

驚きと感動で、ルーナはふるふる震える自分の指先を見つめる。

「頭に魔法語は浮かんだ？」

ユアンの問いにルーナは興奮したままうなずいた。

「そういえばあれはなんだったのだろう？ その答えはユアンが明かしてくれた。」

「魔法語を解するっていうのは、そういうことなんだよ」

「んんっ？」

きよとんと首を傾げるルーナに苦笑しながら、ユアンは思索しながら口を開いた。

「えっと、覚えるとは違って、魂に刻み付けられるって感じなんだ」

ユアンの言っていることは難しかったが、先ほど体験した感覚を思い起こせば、なんとなく意味するところがわかった。

覚えるとは違う、刻み付けられるような焼きつけられるような感じで、記憶するのとは違い、絶対に忘れることはないとわかる。

「魔法語をただ口にするだけなら誰でもできるよね。でもそれだけで魔法が発動しないのは、魔法

語を解する——つまりさつきみたいに魔法語の呪いを理解し、その『呪』を魂に刻ませる必要があるからなんだ。そして解するっていうのにも才能が必要で、どんなに大きな魔力を持っていても、才能がなければ役に立たない。逆にその才能があつたとしても、魔法を発動させるだけの魔力がなければ意味がないんだ。だから高位魔法を使える魔法使いが、貴重で尊敬されるんだよ」

ユアンの説明にルーナはうんうんと真剣な表情でうなずいた。

(つまり、ゲームとかで魔法の巻き物スクロールを使う感じだよ。魔法語の才がレベルみたいなもので、例えばレベル10で覚えられるっていう巻き物があつたとすると、そのレベルに足りない者は巻き物を持っていても魔法が覚えられない。レベルに達して覚えることができる人でも魔力、つまり規定の魔力量マジックポイントがなければそれを唱えることができないってことだよね?)

自分のゲーム知識に置き換え、なんとなく勝手に理解したルーナは、もう一度同じことを試してみた。

『しゃじゃーる・ディア』

呪文と共に弱い光がルーナの指先に灯る。だがすぐまた消えてしまい、ユアンが見せてくれたものとはどう見ても違う。

「なんでえ？」

不満そうにルーナがつぶやくと、ユアンは困った顔で彼女を見た。

「うーん、発音、かなあ……」

(ガーン……)

がつくりと頭を垂れるルーナに、どう慰めようかと慌てるユアンだったが、ちょうど鳴り出した時計のオルゴールに救われた。

「えと、今日はこのくらいにしよっか？」

未だ落ち込んでいる妹に、ユアンは誤魔化すように授業の終わりを告げたのだった。

第三章 繋がれてゆくもの

春らしい陽気の四月。

昨年十二月の誕生日で五歳になったルーナは、王都から遠く離れたベルデの森にいた。

この森はクレセニアの西、隣国エアデルト王国との国境にある霊峰ロウゼイル山の裾野に、両国を跨ぐ形で広がっている。

この地を治めるベルデ子爵は、リヒトルーチェ家の遠縁にあたる。その嫡男の結婚式にあたり、招待された公爵夫妻と共にルーナも数日前からベルデに滞在していた。

本来ならばルーナは本邸にて留守番の予定だったが、弱冠五歳の娘を、使用人がいるとはいえ一人で残すことを心配した両親は、結局彼女を伴って招待を受けることにしたのだ。

緑の隙間から漏れるキラキラとした太陽の光を、ルーナはまぶしそうに目を細めて見上げた。

「トマス、あの鳥はなあに？」

「ああ、あれはキルルですよ。あの頭にある緑の羽根が特徴ですがな」

白髪頭のトマスは、木の枝に止まった小さな鳥を指差して答えた。

トマスはベルデ子爵家に勤める使用人で、ルーナたちが滞在している間はもっぱら彼女のお守り

立ち読みサンプル
はここまで

を仰せつかった。ルーナはこの物知りな老人を祖父のように思っ
て懐いており、彼もまた彼女を実の孫のように可愛がっていた。

今日も二人は手を繋ぎ、子爵家の館から程近いベルデの森へと散策に
来ていた。

「あつ、兎がいる！」

不意に前を横切った兎をルーナは嬉々として追いかける。トマスは
そんな無邪気な姿に微笑みながら後を付いていった。

「まっつてえ」

夢中で追いかけているうち、ずいぶんと奥に来てしまったらしい。
ハツとしたルーナは、思わず後ろを振り返り、そこにトマスの姿を見つけて
ホッと胸を撫で下ろした。

（最近肉体系年齢に、精神年齢が引きずられてる気がする……幼
児を演じてるとそうなっちゃうものかなあ。まあでも実際五歳だし。
痛い人ではないよね。うん）

自分への言い訳をこっそりつぶやきつつ、ルーナは恥ずかしそうに
トマスに謝罪する。

「ごめんね。つい夢中になっちゃった。どうしよう、帰れる？」

尋ねるルーナに、トマスは微笑みを浮かべて首を上下に振った。

「大丈夫です。わしはこのベルデの森の民と呼ばれる一族の出でして
な、この森も庭のようなのですんで」

「そうなんだ。トマスってすごいのね」

尊敬の眼差しを受けて、トマスは照れたように頭を掻く。

「んでは、戻りましょうか、嬢ちゃま」

トマスに促され「うん」とルーナが答えかけた時、近くでガサガサと
葉を揺らす音がした。

「な………に？」

ビクッと震えるルーナを後ろに庇い、トマスはじつと音がした方向を
睨んだ。

鹿や兎の類いならば良いが、熊や狼、さらには魔物の類いならば厄
介だ。トマスは、視線を外すことなくそつと腰から護身用の短剣を
引き抜いた。

老齢とはいえ、森の民の血を引くトマスは短剣の扱いに長けてい
る。熊一頭くらいなら追い払う自信があった。

だんだん近づいてくる音に、トマスとルーナの緊張は高まる。

気配はゆっくりとではあったがさらに近づいてくる。目の前の低木
ごしに影が見えると、トマスは胸の前に短剣を構えた。

こちらの気配に気づいていないのか、影はなおも近づいてくる。
瞬間、ガサリという音と共に低木の枝を払う手が見えた。

「えっ」

その手を見てルーナの口から小さく驚きの声漏れる。低木の向こう
から現れた手はどう見ても人間のそれだったのだ。

驚く二人の前に次いで現れたのは、緩やかに波打つ金茶色の髪
の、黒い服を着た幼さの残る少年だった。